〔論文〕

1920年の華北大旱害をめぐって

―東亜同文書院生の調査旅行報告が東亜同文書院の調査を走らす―

東亜同文書院大学記念センターフェロー、地理学　藤田　佳久

1. はじめに

本論は、1920年に華北の広い範囲で生じ、一大救援活動が国際的にまで展開した「大旱魃」と「飢饉」をめぐって、書院側がそれを一大事ととらえ、急遽研究部が派遣した書院生による現地調査による生の報告が、「大旱魃」への疑問を示したため、書院の研究者による調査団を新たに組織し、派遣させ、はたしてそれが本当に「大旱魃」であったかどうかについて確認するにいたった経緯と結論を検討し、書院生による調査の観察記録の客観性の一端を明らかにする。

2. 1920年の華北の「大旱魃」

この大旱魃について、1921年、東亜同文書院（以下書院）は珍しくもその調査報告書を刊行した（注1）。この大旱魃については、例年の大旅行とは別に書院生を現地へ派遣するという緊急体制をとるなど、大いなる関心を持ち、日本国政府や日本社会に救援のアピールを目指したものと思われる。実際、ひとつの調査班がまだ現地から帰校する前の1920年秋、他の調査班の報告をふまえ、根津院長みずからが「2千万人が飢饉状態」であるとの情報を伝えるべく上海から日本へ旅立っている。

この報告書の「序」によれば、この「大旱魃」について次のように記されている。少し長いが引用してみる。

「大正8年（1919年）より大正9年秋にわたる間の大旱魃によれる北支那の直隷、山東、河南、山西、陝西5省に於ける飢饉の状況は詳に世人に報道せられし所、我が書院に於いても昨大正9年10月数班の調査隊を派遣し実地に調査せし所を刊行せり。而して大正9年秋より大正10年春に至る間に前に未だ嘗て見ざる救援策おこなわれ、幸いにその惨害を救うを得たるは大に注意すべき所、茲に書院は10年の7月8月の間に3班の調査隊を派遣し被害の最重区域を踏査し救済の方法及救済前後の状況を編し、本報告をなすを得たり。

被害地方は5省の間に於いて凡そ284県に亘り、其の間の人口は精確に知る能はれども大率1750万人、戸数は250万戸と計られ、この間に救済を擁すべき者多大なりしと雖も前後の策能く行われしは、一般民生の幸福之に過ぎたるはなし。

北支那一帯の雨量は平時に於いても甚だ少なく、天津に於ける15年間の平均雨量は僅かに524糎にして我国の雨量に比しては3分の1或いは4分の1に当たるを見、之が為め北支に旱魃起り易く、其旱魃は古来膨大飢饉を惹起し、史に天旱民饉の筆を断たざる所以なり。斯かる歴史的飢饉に慣れたる地方なれば、一般人民は殆ど我国人の想像しがたき貯蓄心を有し、一朝の災害に際しては、多くは自ら生を保つべき術なきに非ず。此の民生の覚悟あると共に、今回は幸にも外国人及支那政府の救済其法を得、たつ交通機関も昔時に比し多いに進歩したる者ありし為、其平糶法のごとき古に比すれば大なる規模に行われ、満州其他の粟、高粱を直ちに災地に送り、之を貧民に施与するを得たれば惨害を防ぐ鮮少に非ざりき。

世人往往、北支飢饉は世に称せられたる如き大惨状に非ざりしを想い、報道の誇大なりしを説く者あれど、是れ支那の生活状況及び貯蓄心を知らざるに出つとすべく、支那の飢饉の救済は我国の飢饉に比すれば甚だ容易なるものありともすべく、救済の比較的に容易なるは是れ其の国民の先天的性質に起因する多きなり。古来屢惨害を惹起する北支飢饉に対し、今回は未だ嘗て歴史に見ざる救済策の行われしは注意するを要し、且つ将来の飢饉に対し範を垂るる者と称せざる得ざる也。

本報告は主として鈴木擇郎氏、藤井禎輔氏、城慶次氏、鶴見寿氏、和田宗二氏、藤野進氏、書誌の実地調査に基づく者なり。

大正10年9月20日

上海　東亜同文書院研究部（注2）」

以上の文面からすれば、1919年から1920年にかけて華北の5省に及ぶ広い範囲で大旱害があったこと、その報道が大きかったので反響も大きく、書院は1919年秋に書院生の現地調査班をいくつか送り出したこと、その頃から救済が行われ、かなり効果があったとされるので、書院は1920年夏に今度は研究スタッフを3班編成して、この救済方法と救済状況について実地調査に派遣し、この報告書を作成したとしている。

ちなみにこの報告書は、救済状況と住民からの聞き取りなどの内容の5省分からなり、B5版、48頁で、調査をした2カ月後の1920年（大正9年）10月に刊行され、速報的な役割を果たそうとしている。

ところで、書院はこの大旱魃に対して、恒例の大旅行調査とは別に書院学生をいくつかの班に編成し、現地を区分して調査に派遣したことは異例のことであり、この大旱魃に多大の関心を持ったことが分かる。しかも、書院生の調査の後、さらに書院の研究者までが班を構成して派遣したことはもっと異例である。普通であれば、書院生の調査でほぼ大旱魃の状況は理解できるはずだからである。大旱魃がさらに調査するに値するほどのレベルであったのか、あるいは他の理由があったのかは以下明らかになろう。

注目することは、書院研究者が派遣した書院生の調査のあとに自分達も班編成を組み、現地に乗り込んだ異例な点であり、先発した書院生の調査結果になんらかの関心をもったのではないかということが推測される。そこで、書院生による調査とその記録について見てみる。

3. 書院生による大飢饉調査編成と調査コース

（1） 調査班の編成

書院生の飢饉調査は5班が組織された。第1班は4人（八波、三池、西岡、菅波）、第2班は5人（小倉、西郷、栗山、江野村、横内）、第3班は4人（富岡、岩本、朝日奈、梅森）、第4班は4人（改田、野崎、片山、蛸井）、第5班は5人（山本、岩井、市橋、山内、久村）で合計22人の書院生が参加した。

この22人が選ばれた理由は、記録の最初に記されている。

第1班では三池が、最大の楽しみにしていた夏の大旅行は民国を理解する上で最高のチャンスで楽しみにしていたのに、「所が不幸にして私たちは、病気や事故のために故山に帰り、この繊細一隅の尊い体験を逸してしまった。」仲間たちがヘルメット姿で雄々しく大旅行から帰校するのを見ると「敗残者」のような寂しい心になり、楽しい気持ちになれなかった。「然るに、10月18日の夕、突然私たちは北支那飢饉調査の命を受けた。思いがけぬ喜びに、全く私たちは小躍りした。」と代表して記している（注3）。

第2班の西郷（原文は西本）は、第1班の三池と同様に大旅行に参加できず、やはり破れた敗残者のように心は曇り続けていたその10月18日の午前、「突然も突然、大村教授から急がしく北方支那飢饉調査旅行の企ての話があった。彼らは惨めな上海調査班に飢饉調査旅行の特権を譲ってくれた。私は今でも彼らの温かい心に感謝している。そして幸いにそれは短い時間の旅であった。それでも私は書院の華のひとつである支那内地旅行のどんなものであるかを知った。」と寂しさから喜びへの大転換を述べている（注4）。

第3班の記録者は、出発の日に「飢饉だ飢饉だとさわぎたてるものだから、われわれは院命に依って遂に調査旅行をすることになった。実のところを言えば、調査するよりも病気で大旅行を棒に振った損失？を償うための支那内地の人情風俗を見て来ようと思ったのだ。」と記し、病気で大旅行に行けなかったことの代償として出かけるとしている（注5）。

また、第4班の記録者は、「希望の的だった大旅行にも行くことが出来なかった悔恨の情を胸に潜めて居ったのに、突如として飢饉調査の企てあると聞いた時、僕らの胸に燃ゆるような旅行熱がひらめいた。無理でもあったろうか、まあ追試験連中に譲って貰い、何うにか旅行することを得る様になった。」と述べ、大旅行へ参加できなかった無念さと、この調査でその無念さをはらせる喜びを表している（注6）。

第5班では山本博康が、「病気の為で大旅行に行くことのできなかった、言はば敗残者の群が5人、思いがけない飢饉調査旅行を命ぜられて、今出発の勢揃えを」と書き始めている（注7）。

以上、いずれの班も、病気などでその夏に恒例の大旅行へ参加できなかったメンバーであり、折からの飢饉情報の中、書院側の大村欣一教授（地理学など）が中心になって、緊急を要する飢饉調査の実施の必要性を、大旅行に参加できなかった書院生に短期間ではあるが、調査担当させることにより、大旅行体験を味あわせるという一石二鳥のプランとして提示し、実現させたということがわかる。特に救済にも関係する緊急の調査は、大旅行とは別の意味でこれらのメンバーを新たに鼓舞したことは、各班の自由な記録から十分うかがわれる。こうして20日間ほどの飢饉調査が行われた。ただし、第5班は25日間と他の班より若干長い調査日数となり、帰校後、心配した馬場教授などから注意されたという。

しかし、10月18日に書院側から依頼があり、翌19日には出発という、書院生にとっては極めてあわただしい日程であった。書院側ではこの飢饉への緊急の対処が浮上し、2年目に入った秋の収穫期の状況確認など、時期的に待ったなしで実施しなくてはならない状況があったものと思われる。そしてこの時期、次々と帰校してくる大旅行班を迎え、一層意気消沈する地元滞在班などの学生への配慮もあったものと思われる。

（2） 飢饉調査コース

次に調査コースを見てみる。調査依頼のあったなんと翌日の10月19日には5班全てが揃い、多くの学友たちの院歌に見送られ、校舎を出発している。全班とも船で揚子江をさかのぼり、漢口までは同一のコースをたどったのち、それ以降は各班別々のコースに分かれて進んでいる。

第1班は、漢口から石家荘、太原、保定、北京、天津、済南をめぐり、対象地域の外周ゾーンをカバーしている（図1）。特に山西省まで足をのばし観察しようとしたところが、伝えられていたこの飢饉の規模の大きさを示している。

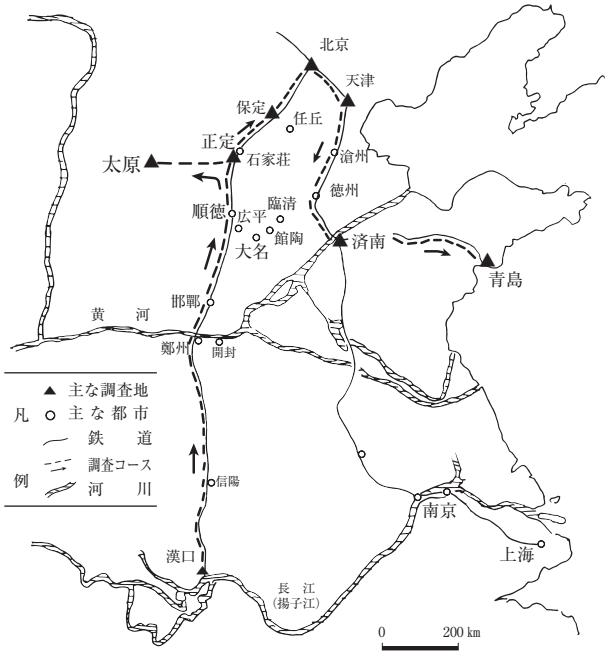

図1　飢饉調査第1班の調査コース（1920年10月）
（調査旅行日誌より作成）

第2班は、漢口から邯鄲、広平、曲周、邱、館陶、臨清、高唐、禹城、済南、青島のコースで、核心と思われる地域の真ん中に入り、西から東へのゾーンを調査している（図2）。

第3班は、漢口、順徳、高平、邱、臨清、青島のコースで、一部は第2班と重なるが、第2班のコースのやや北側を並行するゾーンとなっている。このコースも核心ゾーンに狙いをさだめたものと思われる(図3)。

第4班は、漢口、信陽、遂平、鄭州、洛陽、開帰、封徳、徐州、南京のコースで、黄河以南の南部地域を対象とした調査となっている(図4)。

第5班は漢口から一気に北京へ北上し、保定から東へのコースで、高陽、任邱、河間、徳州、

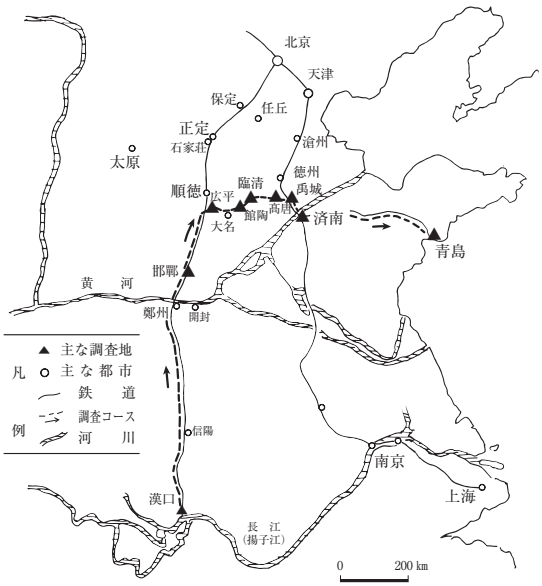

図２　第２班の調査コース（1920年10月）
（調査旅行日誌より作成）

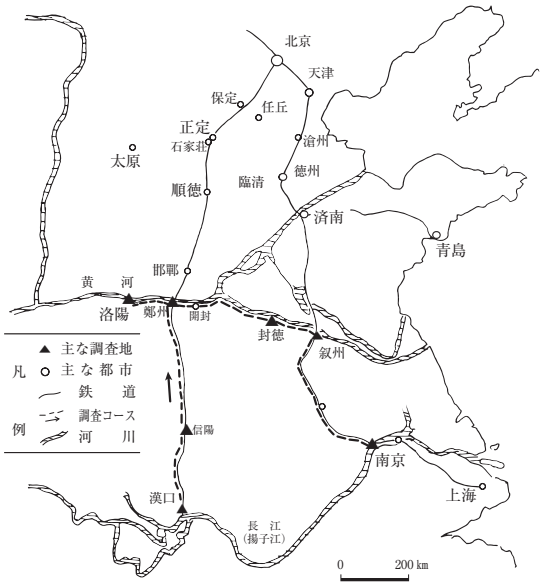

図４　第４班の調査コース（1920年10月）
（調査旅行日誌より作成）

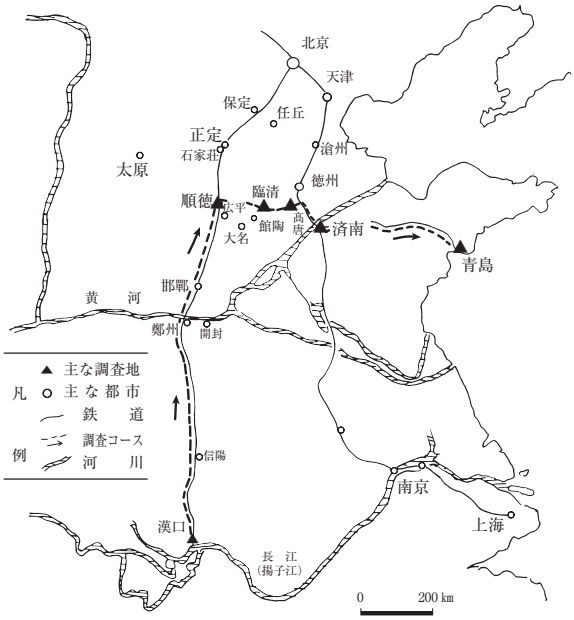

図３　第３班の調査コース（1920年10月）
（調査旅行日誌より作成）

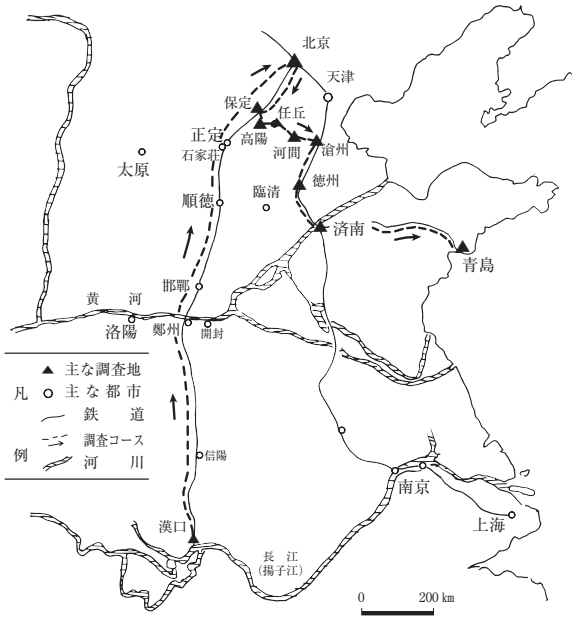

図５　第５班の調査コース（1920年10月）
（調査旅行日誌より作成）

済南、青島へと続く。これも核心地域を狙ったゾーンの調査となっている(図5)。

このように見てくると、調査地域の設計は出来ており、大村教授ほか書院側がそれらを設定し、各班に調査地域を割り振ったことがうかがわれる。書院生への調査依頼の翌日には各班が出発できたのは、この飢饉調査に関しては、大旅行の学生側の自発的自由度とは対照的に、ほとんどが書院側によって準備されていたということが出来る。

4. 各班による飢饉状況報告

では、各班は各コースの中で飢饉の状況をどのようにとらえたのか。ここではデータによる報告書ではなく、日誌記録の中から彼らの観察や実感を抽出してみることから始める。

(1) 第1班の場合

第1班は比較的観察をこまめにしている。漢口から早速状況把握を始め、領事館や租界の郊外の日本派遣隊を訪ね、聞き取りをしているが、大した手掛かりはなかったとしている。この一帯ではこれらの機関は大飢饉についての認識は殆どなかったものと思われる。

次いで石家荘へ向かうが、信陽付近から旱魃の兆候が表れてきたとしている。すなわち「既に一年近く降雨を見ないという田や畑は、ものすごいまでに赤く乾燥しきって埃立っていた。棉や高粱も大部分丈低くして枯死していた。信陽を去る約1時間余、明港という停車場では、見るもみじめな老若の災民の群が、無蓋車に満載されて移動しつつあるのを見た。そして、その先の確山地方では、この付近も旱魃がひどいと見えて、山峡の狭い白埃った畑に、棉や稲は5、6寸であわれな実を結んで、枯れしおれていた。」(注8)と記している。

しかし、それより前、道中の「山々の柳、櫟、楢、樅などの樹木の見事な紅葉を見た歓喜に胸をふるわせ、涙ぐましくさえなった。」(注9)とし、前述の確山地方の近くの紅葉も自分の心を喜ばしてくれたと述べ、そこには旱魃との関係が見られない観察にもなっている。そして夜中の1時ごろ黄河を渡って北上し、朝の6時ごろ目に飛び込んできた馬頭鎮付近の光景は、玉葱、菜、ニンジンなどはよく出来ていて、「麦も一面に植え付けられて既に2寸ぐらいに伸びていた。」(注10)と観察している。さらに北上した順徳では飢饉らしい状況は見られなかったとしている。

直隷省にはいった憑村付近では、再び災害はかなりひどいとし、「高粱は7、8寸、粟は4、5寸で細い穂を出したまま枯死していた」(注11)と記している。そのあと石家荘では警察、商務総会、駅長などに調査を行っているが、大飢饉についての言及はない。

一行はここから西の山西省へ向かうが、省境の山地を越える前の獲鹿県地方では「麦がよく伸び、高粱もできて、何も旱災をうけていないらしかった。」(注12)とし、柿やアカシア、白樺の紅葉の美しさをめでている。そして山中に入ると、稲や高粱は収穫され、茎が干されていた、としている。太原まで出かけているが、大旱魃への言及はない。その帰路にこの獲鹿県により、県庁、警察署、商業会議所などを訪ねているが、大飢饉の記載はない。

石家荘へ戻った後、北京へ滞在し、日本公使館、華北救済協会、民国側の飢饉救済会、そのほか北京居留民団、亜細亜通信社、内務部などの組織で調査を重ねている。しかし、飢饉情報は言及されていない。

そのあと、天津へ出かけ、日本総領事館、民団などで調査を行い、南門外の野原に移住してきた避難民の状況を次のように報告している。

「穢い襤褸を着、あるいはこの寒い晩秋の日に真はだかでよごれすすけている災民画、見渡す広い埃立った砂原に一面に小さな小屋を造って住んでいた(写真1)。その小屋は皆2坪足らずで、土地を2、3尺掘り下げた上に、高粱の茎で蒲鉾型のアンペラを掩った腰をかがめねば立っていられぬほどの小さな小屋で、これに6、7人の家族が住んでいる。災民は河間府地方から移ってきた者で、6万人と称している。

私たちが近づくと、木の根をかじり高粱の実を

食べている哀れな老若男女が、私たちを取り巻いて、その悲境を訴え、食を求め、薬を請うて、その惨状はそぞろに涙をもよおすものがあった。人間の悲惨もここに至っては、私らの考え得べき範囲の外にある。」(注13)。

写真1. 天津災民の小屋(第1班撮影)

突然の天津への避難民の記録であるが、この人々の避難してきた理由が大飢饉によるものなのかははっきり示されてはいない。その夕方から雨が降り、翌日は済南へ向かうが、一日中雨で、済南へ着いても降りやまなかったことが読み取れる。雨は降ったのである。

写真2. 俄作りの藪医院(第1班撮影)

写真3. 糧なき人々(第1班撮影)

済南は大飢饉の中心地域のように思えたのに、それについての言及はない。そしてその後の青島についても同様であった。記録はまさに大旅行を味わう経験が中心に記録されている。

なお、この班は、前掲の避難民の小屋群とそのにわか住まい(写真2)、食糧のない避難民の姿(写真3)を撮影、掲載している。

(2) 第2班の場合

第2班はやはり漢口で予備調査を行っている。急な要請で予備調査をする余裕もなく出発したが、状況が分からないので各機関を巡って、情報収集に努めている。領事館は済南領事館の管轄だから、そちらで調査をと言い、駐屯軍も情報はなかった。この状況はほかの班も同様であったので、各班の代表が揃って三宜洋行の小林氏を訪ね、小林氏の飢饉地方での体験談を教えてもらっている。

それによれば、書院生のこの調査がもう1カ月早ければ、もっと切実な実情を見聞できただろうとした上で、田畑が二足三文で売られていること、女子供が売り買いされ、18～20歳の美人が20ドル程度であること、買われた女子は上海、北京、天津などで芸娼技の世界に沈むこと、家財道具すべてを売り払い、ほかの省へ避難するが、その途中での悲劇に見舞われること、食べられなくなった若者が土匪になり、土匪が急増したこと、民国の官憲は災民に何も対応していないこと、それらに対して、キリスト協会が活動していること、などの飢饉に伴う深刻な諸局面が発生したことを伝え聞いている(注14)。

そこで新聞社を訪問し、飢饉情報を得ている。まだ見ぬ厳しい状況を聞き、2班はその視点で現地入りすることになったことが伝わってくる。

こうして京漢線に乗り北上し、10月25日、途中の駅で石炭車の上にボロボロの衣服を着た避難民と遭遇し、「彼らは到底この世のものとは思われない程、彼らの顔には飢えと戦った苦痛の影がみられた。漸く飢餓の世界から逃れてきた彼等は此処から更に何処に運ばれ流れてゆくのであろう。」(注15)と同情している。

そして、飢餓は死に面しているのだという目の

前の事態に、彼らの幻滅への自らの運命を想い、なおも生きようとするかれらの姿に、ショーペンハウエルの言葉「万物は盲目的石の表現なり」を思い出したとしている(注16)。

2日後、邯鄲着。ここの警察から飢饉の調査に来たことに敬意を表され報告書をもらえることになったが、その内容には触れていない。そしていよいよ列車の旅から徒歩のよる飢饉地域と思われる一帯を東へ横断することになる。

2名の護兵に護衛され出発。「茫々として果てなき広野は旱魃の惨状を呈して眼前に展開される。」(注17)。しかしどのように惨状を呈しているのか記されていない。午後広平、夜、曲集県着。翌日、黄塵と沙煙のなかを歩く。途中、邱県付近から館陶の間で「殊に惨害の跡甚だしく、土地は砂漠のごとく草すら見えず。所所に果樹が寂しく散在しているばかりであった。」(注18)。「玉蜀黍の収穫殆ど皆無の状態だ。」(注19)(写真4)。そして赤土が続き煙天の中を歩く。

写真4. 悲惨な高粱(第2班撮影)

次の港町臨清から高唐のあいだは土匪の横行地帯で危険視されていたが、ここも黄塵万丈のなかをすすみ、高唐着。31日、この付近からは「高粱、玉蜀黍の畑多く、秋の風に瀟瀟とさわぐ。」(注20)、とあり旱魃の状況はうかがえない。その後、禹城から31日には済南に着いている。ここでやっと安堵して、国のありがたさを論じ、国際的多民族論を展開して日誌は終了している。

全体として、当初の調査への意気込みが後半には伝わってこない。その背景には小林氏から聞かされて予想したほどの飢饉の状況が、飢饉地帯では各知事の対応も含め、危機感を彼らにはあまり与えなかったようにも見える。

(3) 第3班と第4班の場合

第3班と第4班は、日誌にはほとんど飢饉のことは触れてない。いずれも例年行われ、旅行記録を残した先輩の班や、この年、帰校してきた大旅行班流の記録を真似した形を優先したもので、本来の目的の飢饉の実体験や飢饉調査には言及していない。

第3班は添付した写真も飢饉の関係する分はなく、民国の旅の途中の風物詩的写真がすべてである。前半の旅行日誌も旅行途中の班員間のやり取りや、身近な出来事の記録に終始し、後半は、班員梅林が「所変われば品変わる」、「厠所」、「南京虫」、「支那人と風呂」、「土の家」、「言語」、「田舎路」、「田舎の宿」、「穴居」、「護兵」、「城壁」、「知事」、「落花生」、「官憲の力」、「支那の兵士」、「品人の性質」、「支那人と思想」などの文化論を記録したものであり、其れはそれで面白い内容であるが、それだけに短時間の旅行ではあったが、これだけの考察を行ったぞという自分たちの誇りを示そうとしたものといえる。飢饉の調査報告は別にまとめたからということでもあろうが、飢饉の印象がそれほどでもなかったということでもあろう。

第4班も基本的には第3班と同じで、タイトルこそ「糧なき民よ」としながら、内容は各地の訪問機関と出会った人々との事のみ言及しているだけで、飢饉については一言も触れていない。しかも第3班のような文化論といった特徴もなく、自分たちの出会いの記憶を綴ったというレベルである。ただし、写真の中には、鄭州の災民と鄭州駅に積まれた食糧だという飢饉に関する2葉が掲載されている(写真5)。

写真5. 鄭州駅に積まれた食糧と(左)と鄭州の災民(右)(第4班撮影)

5. 第5班による飢饉記録と分析

(1) 飢饉の記録

第5班は前章の中に含めて示すのが筋であるが、他の班に比べ飢饉に関する記録は多く、また飢饉の相対化もしているため、ここでは独立章とした。

漢口では第1革命の跡地を訪ねた後、10月25日からまず北京へ向かっている。当初の計画では北京は予定外であったが、せっかくのチャンスだと学校側には無断でコースを変更した。これがのちに予定の日程枠に収まらず、10日近く延長したため、帰校後、学校側から謹慎3日という大目玉をもらうことになった。しかし、このことが後述するように、この大飢饉の本質に迫るチャンスになったという点で無駄なことではなかったということになる。

出発して、当初は2班のメンバーと京漢線に同乗したため、前述した2班の記録と同様に、途中の駅で石炭を積んだ無蓋車の上に乗ったボロをまとった500人ほどの避難民の群とすれ違っている(写真6)。次に許州駅では粟、高粱を満載し北方へ輸送する列車を見ている。荷車の上には河南張禹県のいわば廉売局というような旗が立っていたと記している(注21)。

写真6. 無蓋車の上の避難民(第5班撮影)

やがて黄河を渡り、夕方5時、到着した淇県には乞食のような100人ほどの群が集まっていた。記録者は此処で、はたして彼らが乞食なのか避難民なのか不明だとする。というのは、以前からこの京漢線沿いの北部には乞食が多いと聞いていたからだとする。

26日朝、北京着。観光もするが、新聞社、領事館、先輩などを訪ね、まじめに調査を進めている。街の中は軍閥の争いが進行中であった様子もわかる。

そしていよいよ南下し、保定着。県衙問を訪問し、軍閥トップの曹錕に面会を申し込んでいるが、出張中であった。代わりに陸軍少将の趨純賢に会うことができ、まれにみる、いわゆる「大人」らしい少将と、近代の風潮や今度の災害のもたらす影響について意見を交わすなど、かなり積極的な行動をとっている。しかし、予定外であった北京での5班の行動について少将は知っており、感服したとしている。外国人の行動は把握されていたのだろう。しかし、交換した意見については記されていない。

次の30日にはいよいよ保定からまず高陽へ向けて陸行する(写真7)。黄河流域の黄砂土とその土埃の中を進み、夕方近く到着した布生産の町高陽では知事と会ったが、今年はコレラがはやり、兵災と蝗災、それに旱災が加わったという。商会や警察所にも訪問するが、警察では調査データがあまりに違うことがわかり、その背景には伝統的なゴマスリがあるとしている。

写真7. いよいよ飢饉地へ(第5班撮影)

31日には書院から指定されていた高陽から河間へのコースを、知事の勧めで旱災の多い任邱経由へと変更している。途中の状況は大したことはないが、「高粱や小米は悪いようにも思う。しかし、此れがこの辺のこの頃の状態に比してどうかということは専門知識と経験がなければわからぬこと。百姓に聞けば割3割の収穫だという。」(注22)。記録者の冷静な目が伝わってく

る。

任邱の知事は災害調査のため不在。科長に会って調査、商会も訪問したが、いずれも救済方法は講じていないとの回答。しかし、この地は「災情殊に甚だしき模様。話によると、樹木の葉、草の根などを食し居るとのこと」(注23)とし、気のせいか、人々の顔も青白く、動きも鈍いとしている(写真8)。

11月1日、任邱より出発。途中の麦作はごく悪いと観察。1～2寸に伸びてはいるが枯れたり、黄色になっているとも観察。そこで百姓に聞くと、今年の秋の収穫は殆どなく、省外へ出ていくものが多いとの回答を得ている。このあたりは米の生産地であるが、穂の高さは4尺足らずで、殆ど結実していないことも観察している(注24)。

写真8. 直隷省飢饉の跡(第5班撮影)

昼食を辛中県でとったあと、河間県へ向かうが、暴兵も出没する社会不安の広がりも側聞する中、「途中避災民の出稼ぎに行くもの甚だしい。2～3人、多きい十数人、小車または馬車に家財一切を積み、一見して直に知れる蒼白な憔悴した顔貌、ある一組の如きは小車の両方に生まれたばかりの嬰児を載せ、女小供は歩かせて親父が推していくのに会った。何れも災情苦痛を訴えて止まぬ。用意の清快方丸を大方振りまいた。」(注25)と旱魃の影響らしき状況を記録している。

11月2日、河間県から土砂降りの中を清河県へ進む。旱害は甚だしく、玉蜀黍は枯れて結実していない。この秋になるのに2～3尺で放置され、高粱も同じ状況だと観察している。しかし、このあたりの主食は高粱に麦を混ぜた高粱麺で、一向はそれを食べている。食糧事情が完全に悪いわけではなさそうである。

11月3日、新河から蒼州へ向かい、途中猛烈な黄沙埃のすごさを味わってびっくりしている。そしてそのあとの土砂降りも体験し、この一帯の風土の荒さを実感している。そして、ここの土こそが窒素を吸収するため、それが農耕に適し、人々をここ黄河流域へ引きつけてきたとも記している。

11月4日、次なる徳州へ向かうが、途中大飢饉らしき光景は見られないとしている。翌日、徳州の知事は飢饉調査で不在なので、科長から色々教えてもらう。この一帯の旱魃はかなり厳しく、平年作の2割だと聞かされたが、本当なのか自問している。

11月5日夜、済南着。翌日、日本語も話せる県知事に飢饉の状況を訪ねると、済南は飢饉地ではなく、それゆえ救済方策はしていないという、けんもほろろな返事であったが、一行は当時排日の強い町であったことからその答えに納得はしなかった。しかも、一方、日本領事館も東拓会社からの先客があり、留守で情報を得られず悔んでいる。

11月7日、青島で上海行きの船に乗り遅れ、一同延期を内心喜び、9日には現地事情に詳しい安部将佐を訪ね、山東の飢饉について訪ねている。しかし、その情報は記録されておらず、記録するほどのものではなかったと思われる。

こうして11月12日、上海へ帰校したが、最も遅い到着であったため大村、馬場両教授から大目玉を食らい、前述の様に3日間の謹慎となった。

(2) 大飢饉の相対分析

以上は、毎日の飢饉地域で直面し、観察もした事象の事実を記録したものではあるが、この第5班は、これらの事象を必ずしもそのまま受け取らず、それをどうとらえるべきかを検討し、11月10日の帰路の船中での記録にそれを吐露している。短い調査旅行ではあったが、その中でも最も長い約1カ月に及んだ調査旅行のためか、彼らに考察する時間が与えられたということであろう。その点があまりにまだ経験のない中で、単に事象を記録するにとどまった他の班とは異な

っている。例年の本来の大旅行が、3カ月から6カ月の長期にわたるのは、経験を積み重ねて自然に事象の本質に迫れるという意義があるように思われる。この第5班はある意味でかろうじて、大旅行の一端に食い込んだということが出来るだろう。

そこで第5班が飢饉を巡るいくつかの事象について、見聞した「大飢饉」は本物であったか、その反証を自ら提示し、その本質に迫る方向を示そうとしている。

このテーマは第5班の記録者が真っ先に疑問を持ち自問したテーマである。

1カ月近くの旅行を振り返り、「飢饉調査の獲物を集めるべく努力してみた。しかも、散漫な頭を通して、船酔いの苦し紛れに、浮かび出た最初のものは、それは、今度われわれが見てきたのをもって直ちに、「飢饉なり」と報告してよいかどうかという問題であった。」(注26)としている。

その理由として、この調査に先立って植え付けられた飢饉の状況は、家族離散、飢えた人々がごろごろと倒れている、盗賊の横行など、醜い状況であった。

一般に人はこのような残酷な飢饉の状況を予想したときに、その実態がそれからかなり離れていた時、予想の反動として、その飢饉を実態以上に軽く見てしまうことになりやすい。記録者としてはこれは避けなければならない問題であり、より観察者として冷静で客観的な判断が必要だとする。

しかし、それを理解した上でも、今回のこの調査の報告として、「決して飢饉という程度のものに非ず、ただ例年より不作なるのみ」(注27)と言いたいとする記録者は、明らかに今回の飢饉は飢饉ではないと直感的ながらも判断している。

そして、これまで見てきた飢饉と思われた現象の反証の試みを行っている。

ア) 京漢線で第2班と第5班が見たボロを着た人々が無蓋車にたくさん載って南下していた状況について。

→ 聞けばこの状況は毎年繰り返され、10月下旬の寒冷な気候になると、貧民たちは出稼ぎのかたちで気候と食の良好な所へ移動する。そして春になるとまた戻ってくる。

イ) 不作は各地で見たし、一見飢饉状況に見えたが。

→ 北支は地味がやせ、収穫も多くない。貧民が食に苦労するのは毎年のことである。今年が少し不作だったに過ぎない。

ウ) 「飢饉救済飢饉救済」と叫ばれたではないか。

→ それは誰が叫んだのか。それは人々でも政府でもない。実際各地の役人たちはあまり飢饉と騒いではいなかった。それをあおったのは米国である。これが飢饉ならもっと早くから毎年救済をすべきである。ことさらに人道主義を標榜し、民国政府を、さらには各国までゆさぶった米国の野心的背景こそ明らかにすべきである。

エ) 京漢線から見えた果てしない広涼とした原野は、旱害によるのではないか。

→ あの広漠たる原野は人も少ない。そこに豊かな作物が実ったとして、交通の不便さと少ない人口の中で、誰がそれを消費できるのか。不作は都市の物価を少し上げるだけで恐れるものではない。

オ) 任邱河間県の間で沢山の移民をみたが、これは飢饉によるのではないか。

→ 例年より多いようだが、これも聞けば例年のことだという。必ずしも飢饉によるものではない。不作の他に群集心理で一人が動くと盲目的に見習う人々が現れ、移民を少し多く引き起こしたものだろう。飢饉飢饉、救済救済の大声に促されたものではなく、しかも貧民だけが移民となったのではないと思う。

カ) ではなぜに飢饉の声がこんなに大きくなったのか。

→ 米国人の飢饉救済という大声に目を覚まされた政府と飢饉地方といわれた地方の衙門や有識者が、声の大きさに乗じて不作状況を改良すべく、さらに声を大きくして救済資金を集めようとし、官吏は私腹

を肥やすチャンスと見たためだろう。

キ）青島で沢山の牛の行列を見て飢饉のせいかと。

→　阿部少佐によれば毎年今頃の行事だと。

ク）山東鉄道内で書院先輩が、最近新聞が天津で細民調査をしたら、非常に増えていたと報じたという。

→　しかし、先輩は今まで以前にそんな調査をしたことを聞いたことがないという。

ケ）当時の新聞は直隷省と山東省の災民5千万人と報じられた。

→　中国人は文章としては遠大だが、報知としては誇張しすぎている。その3分の1、4分の1でも多すぎるぐらいだ。現地でもそんな気配は見られなかったし、衙門へ行っても一向に要領は得なかった。救済法もじつに貧弱で話にならなかった。

以上から、第5班の飢饉調査の結論は、騒がれるような「大飢饉」ではなく、例年より少し不作なだけであり、それを「大飢饉、大飢饉」と吹聴したのは米国であって、その声に地元の論調なども同調し、政府も仕方なく重い腰をあげ、地方政府の衙門はむしろこれを利益の機会ととらえ対応したとまとめている。

6. 東亜同文書院側の対応

（1） 特別調査隊の編成と救済組織

それでは、以上の報告を受けて5班を派遣した書院側はどのように対応したのであろうか。

これについて第5班の記録に次のような面白い記事がみられる。前述したように第5班だけ調査旅行からの帰校が遅れた。そのため、「院長閣下もだいぶ我々の帰るのを待たれたそうだが、つい一昨日、他の班の報告を集めて「救済を要すべき人員2千万人」なる報告を持って帰国されたときいた。」と記し、ここでは2千万人の数字の妥当性には触れず、無事使命を果たし帰校出来たことに微笑が浮かんだと落ち着いている。

いずれにせよ、根津院長は第4班までの報告を基に、大飢饉を事実と認め、2千万人の被災者という数字を日本へ伝え、日本からの援助を求めようとしたことが分かる。

然るに、第5班の報告の結論は大飢饉ではなく、やや強めの不作だという。調査班を派遣し、遅ればせながらこの報告を最後に読んだ東亜同文書院研究部の大村、馬場両教授は、第4班までの報告との違いに唖然としたはずである。何の疑いもなく、2千万人という数字を根津院長に託したことの責任も痛感したことであろう。そして現地に通じている両教授は第5班の各反証をさもありなんと理解したのではなかろうか。そこで自分たち自らが現地に赴き、調査を行うことになったのであろう。まさに第5班の報告は、書院自体による現地調査の必要性を惹起させ、その実施まで実現させてしまったと言っていいであろう。そして、第5班の報告が、書院研究部を走らせ、こうして大騒ぎになったこの大旱魃、大飢饉が本当であるかの確認が行われることになったのである。

こうして、巻頭で触れたように書院生派遣の翌年の1921年、7月と8月の期間に鈴木擇郎、藤井禎輔、城慶次、鶴見寿、和田宗二、藤野進らにより3班を編成し、被害の最重地域を踏査し、救済の方法、救済前後の状況を中心に報告書を作成することになった。その際、第5班の結論も意識したか、世人はこの飢饉は大惨でなく報道が誇大だという向きもあるが、これは地元の生活状態や貯蓄心を知らないためであり、またその救済は日本よりも容易だとするが、これは国民の先天的性質によるものだとした上で、古来よりたびたび飢饉の災害を受けてきた現地では、今回歴史に例をみない救済策が1年前から行われていることに注意し、今後の範になるものだ、としている（注28）。

しかし、ここでは被害の確認調査は目的にはなっておらず、救援の在り方に中心が置かれている。おそらく、現地では第5班の指摘が当を得ていたことが分かり、一方、課題な救援が行われたことを知って、このような救援中心の調査目的とした（注29）のであろう。以下、簡単に調査結果を見てみる。

(2) 救済会の活動

当然ではあるが、今回の飢饉救済のための救済会組織が克明に調査されている(注30)。その数は30余り。その救済には米仏日がその中心で、民国政府を助け、民国在の外国人も協力している。とりわけ米国の救済資金は群を抜き、米国が中心になった国際統一救済会は約2000万元近く、米国が実質その半分以上近くを出資している。民国側も政府の賑務所が800万元余りを出資しているが米国の半分以下である。当然、民国側により多くの救済会が設立され、特に各地域の救済会が多い。しかし民国側の救済会の6割は、有名無実で出資をしていない。掛け声に応じて組織は作ったが、実際の活動はしていないことになる。切迫感はないと言えそうである。総じて言えば、米国を中心にした外国の救済会が中心的な役割を果たしたと言える。

そんな中で、書院研究部の調査報告書はいくつかの救済会を取り上げている(注31)。たとえば、国際統一救済会は日英米仏の4カ国が呼びかけ、民国在の外国人もまきこんだ救済組織で、前述のように最大の義捐金を集めた。その配分地域は、直隷西部が約550万元、同じ東部は330万元、山東省180万元、河南省370万元、山西省242万元、陝西省106万元、甘粛省190万元となり、そのほか食糧5万トンの直接配分も地域単位ごとに行われた。保定府1.5万トン、正定府1.1万トン、定州7千トン、順徳府6千トン、大名府7千3百トンなどであり、飢饉の厳しいと思われるところに集中している。一方、救済金は直隷省の場合、各県ともほとんどが道路の改修費用で、貯水池や井戸など水周りの整備は3分の1にとどまっている。

日支実業協会の臨時北支那救済事業では、北京、天津、済南の領事への送付金30万円、東洋拓殖、東満州鉄道、朝鮮銀行、花の日会、東洋婦人会から23万円余り、ほか10万円の計約60万円が集まり、河南や陝西、直隷、山西各省そして北京、天津の義賑会、通州や北京、鄭州、天津ほか各地の施療所、各地の災童や災民収容所、通県の2つの施粥所、黒竜江省への移民支援金、その他で銀での支払いといったように、全体としてはきめ細かい。

また、米国赤十字社は山東、直隷、山西、河南の4省と省間を結ぶ900マイルあまりの道路建設に救済事業を当てている。他の組織のような直接的な救済ではなく、インフラ整備である。前述の国際統一救済会とは棲み分けをしているように見えるが、これは米国だけの資金であり、そこに米国の利権がからむとすれば、第5班の報告が言及した米国の「飢饉救済」という、大声の本来の狙いがここにあったのかもしれない。それに感付いたように思われる第5班のメンバーは極めて優れていたと言えそうである。

では民国政府の救済はどうだったのか。資金は海関の付加税借款や各省各種の賑災公債、各救済団体からの寄付金や日本からの金3万円などで、約850万元、うち半分が海関の付加税借款が占めた。それらを華北の関係省に配分し、その中では日本の金もかなり配分されている。そのほか鉄道敷設を中心に、郵便や電信にも配分しており、公的なインフラ整備に援助され、第5班の報告が言及するように声をより大にする地方の官吏の私腹化への可能性は大きい。鉄道敷設では甲府の人数や雇用状況も取り上げている。

そのほか各地の民間救済会の種もみの配分など、地域密着型の救済事業も紹介している。

以上から、東亜同文書院研究部の調査目的の中心が分かり、書院生達の調査を補充する形になった。

(3) 住民からの聞き取り調査

今回の東亜同文書院研究部のもう一つの調査は、現地住民に対する旱害への対応についての聞き取りであった。そしてこれは多分に派遣された書院生の調査、とくに第5班と重なる部分であり、それこそ、第5班の報告が研究部にこのような確認の現地調査をさせたと言える。

現地での聞き取り調査はいくつかの項目からなっており、ここではそれらを順番に、しかも簡潔に紹介する。

まず、今回の旱害に対する地元住民の対応は多様で、財貨を売ったり、財貨の無い者は労働

をしたり、あるいは救済会の支援を頼って鉄道無賃の恩恵により物が豊かで安価な地方へ出かけて食糧などの購入もできたという。飢饉のような災害はこれまでも多く、そのため、多くの住民は平素から貯蓄倹約をし、旱害にも対応できた。したがって、今回の旱害でも飢餓死するものは殆どいなかったと述べている。

そのため貧民であっても、自分の家をつぶしてしまった割合も少ないと観察している。衣服についても、今年は収穫もあり、特に不自由ではないようだともみている。実際、今年の収穫は、春作物で5割から7割で、鄭州のように不作がちなところもあるが全体としては回復基調で、一度省の外へ出稼ぎとして出た連中もみられたが、今は多くが帰省してきているとの動きも把握している。

飢饉の際、一体どの程度困窮したかについては、たとえば、樹木の芽や草根を食べるというが、それは貧民層の慣習であり、旱害のためではないこともわかった。臨清のような綿作地は住民が相当貯蓄しており、飢えることはなかった。そして、飢饉のときに発生する発疹チフスなどの流行病もなく、一部地域でコレラの発生を見たが、病気の死亡率にも変化はないこともわかった。また病気の発症状況も例年と変わらず、施療所での患者のデータから、旱魃が直接農民の衛生状態に影響してはいないとも判定している。ただ、草が不足し車馬の運賃が高くなったことはあった。物価の問題は、このような時に穀物を安く販売すれば多くの問題が解決すると提案している。

飢饉のときに土匪の出没が社会不安をもたらすが、そのような地域でも土匪は回族が多く、地元民が加わるのはアヘンを吸う連中ぐらいであるため、被害はそれほど広がらないという状況も理解された。

全体には、旱害によって麦価格が高騰したために地域経済が落ち込み、それによってまだ回復に時間がかかる面もあり、それが工業や商業に影響しているところもあるという。

そんな中で子供たちは学校へ行けなくなり、わずかだが廃校になった学校も出たという。しかし外国、特にキリスト教会の教育支援は目ざましく、多くの子供が教育を続けられた点が注目された。戦前におけるキリスト教会の活動がかなり農民からも支持されていたことをうかがわせる。

一方、県知事など地方の官吏は全く飢饉の対策すら考えてもいないケースが多かった。当然、救済策などを講じるノウハウさえないと判断された。もちろん、政府は外国からの支援事業からの刺激と世論の政府批判によって重い腰を上げ、一部は政府による食糧や衣服の供与に感謝した災民もいたが、全体にその救済額は少なく、しかも官吏による義捐金の搾取や奸商を利用して賄賂をむさぼることなども知られ、効果をあげていないと判断している。

そのような中、一般的には農民たちは自分で身を守り、これまでの困難な経験を生かし、政府や地方官吏を頼ることはせず、自衛の力で解決してきたのであるとしている。

(4) まとめ

報告書には、まとめの章がないが、各項目を検討する中でまとめ的に言及されていることを引用すれば次のようになる。

「我等経過したる各県につきて見るに今春の収穫は平均5～6分にして、甚だしきは3分作の所あり。若し昨年の不作を大飢饉とせば、今年も再び飢饉と言わざるべからず。しかも本年不作が何ら社会の注意を惹くなくして、昨年の不作のみがかく世人の注意を喚起するに至れる原因につき多少の疑いなき能わざるなり。」(注32)。

つまり、現地調査の結果、昨年を中心とした「大飢饉」はそれほど大騒ぎするものではなかったこと、それなのに大騒ぎした理由についてはそれがなぜであったかを検討する必要があること述べ、第5班が指摘したように、調査の結果、米国が先導的に飢饉救済を唱え、しかも最も資金を提供したことも確認している。

7. まとめ

1920年の突然降って沸いたような華北を中心

にした「大飢饉」は、日本も含め米国を中心とした国際的な支援事業の展開に、東亜同文書院もおそらく当初は一大事だと思い、その窮状を訴え、書院の経営母体である日本の東亜同文会へ連絡し、日本からの義捐金を大々的に集め、民国を支援しようと判断したように思う。急遽、書院生からなる5班をその調査に派遣し、最後に帰校する第5班の報告を待たず、第1～4班までの調査報告を基に、根津院長直々に東京へ向かい、2千万人が飢餓に苦しんでいる、と伝えたのはその表れであろう。もちろん、前述したよう日本はその後も救援の拠出金を送り、かなり貢献したことも事実である。

しかし、1週間遅れて帰校した第5班は、3日間の謹慎まで命じられたが、その報告では、第4班までの報告とは違い、初めてみる飢饉関連と思われる諸事象を、初めてであるがゆえに、以前との比較や当該地域の慣習をふまえ、客観的、冷静に見て、適格な判断を下し、大騒ぎしている「大飢饉」の存在に疑問を呈した。

この報告を遅ればせながら読んだ東亜同文書院の研究部・大旅行研究室のスタッフは、おそらく頭を抱えたに違いない。書院生の現地をふまえた「大飢饉」への反証は十分検討の余地があったからであろう。そこで、スタッフたち自らが現地へ入り、国際的な救済事業の展開を克明に調査し、さらに現地の組織や住民からの聞き取りにより、第5班の判断の裏づけを行う形で「大飢饉」なる実態に迫ったのである。

その結果を一言で言えば、1920年の飢饉は、例年の不作レベルがやや大きかった程度であったと判断している。これにより、書院は大きく誤った情報を出さずにその見識が守られたと言っても過言ではない。

第5班の書院生の報告は、書院研究部の報告書よりさらに先を読んでいる。米国が先導したことは書院研究部の報告書も認めている。いわば第5班の報告内容の追認である。ではなぜ米国なのかは書院研究部の報告書は言及していない。いや言及を避けていると言った方が正しいだろう。なぜなら、書院研究部の救済事業費の内訳検討の中で、米国だけの赤十字社の支援金は殆どが「大飢饉」の発生地だとされた華北での鉄道新設に投資させているところまで明らかになっているからである。これは本来の赤十字社の緊急支援事業としては、目的からずれていると言えるだろう。

第5班は、この米国により拡大した飢饉救済事業の先導的方法に、米国の思惑があるのではないかと言及している。その思惑こそ、「大飢饉」という大声を出し煙幕を張ることにより、米国の利権が確実に確保されるであろうこの華北の鉄道網の新設、道路網整備を確保したことにあったと言える。ただ、書院の研究部はそれに気付きつつも、それが国際問題に絡むことを懸念し、そこまで明記しなかったということであろう。

このように見てくると、書院自体は根津院長も乗り出したほどであるが、この「大飢饉」騒動にまきこまれたかどうかは今後調査する必要がある。しかし、少なくとも研究者の集団である書院研究部は自らの現地調査による報告の中で自重できたことは幸いであった。ただそれは紙一重のことであった。第5班の報告がなかったら、あるいは第5班が他の班のように短絡的であったなら、書院自体も「大飢饉」騒動に巻き込まれ、米国のお先棒をかつぐことになったに相違ない。あらためて第5班の調査報告が書院研究部を走らせたのである。そこに書院生の報告の価値を確認できよう。

ところで、書院研究部は、ある種の緊急対策として、例年の大旅行実施の時期に病気などでその年の大旅行に参加できなかった書院生を5班に組織して、秋に「大飢饉」地域の調査をさせるという親心を示した。期間は20日程度であるが、現地へ入る日数もあり、実際に現地での滞在は1週間あるかないかほどであった。しかも滞在は少なく、ほとんど移動の観察調査であった。おそらく、書院の研究部は外から響いてくる「大飢饉・救済」の大声の中、それを信じ、調査旅行が初めての書院生でも、現地へ入れば、旱害と飢饉はすぐわかり、その報告には疑いがないと思った筈である。第4班までの報告はまさにその期待通りであったのだろう。しかし、日誌を克明に読むと、飢饉に触れてないケースもあり、どうせ

飢饉だろうという先入観によるいい加減さもある。それでも飢饉が結論だとみなされたのだろう。

ところが、第5班だけは違っていた。当初から予定外の北京にも立ち寄り、それでいて好奇心と広い関心を持ち、まじめに北京でも調査を進めている。結果的に他の班より10日近く調査日程が延びたが、これが班員の考察力を高めたと言える。つまり、書院研究部の先入観にとらわれない、現地での思考が事象の根源を考察する余裕を生んだということである。もし、この時、例年通り大旅行調査を経験した書院生を再度派遣していたら、3カ月から6カ月の経験が、この第5班と同様の結論を引き出していたに違いないだろう。

このように見てくると、大旅行の雰囲気の中で育った書院生も、その関心の度合いはあるにせよ、初めてのそれも1週間程度の旅行では実態はつかめないということであろう。戦後、文化大革命当時やその前後、熱烈歓迎で2週間ほど訪中し、帰国後に中国事情を書いた研究者のレポートは全く使えないし、使えないことの証拠にしかならないということは、今日とは事情が違うとはいえ、同様のことであり、肝に命ずべきであろう。しかし、その程度の調査旅行でレポートを書く例は今も多い。この「大飢饉」騒動は他山の石とするよう研究者として心したい。

なお最後に、筆者の方からこの飢饉について若干の補足をしておく。民国側の史料ではこの大旱魃はどのように記録されたのであろうか。

書院研究部による調査報告の中に、天津の流民の報告があり、それによると、1920年、天津には最初10万人の流民がおしよせたが、 日本領事館の救済で、1921年1月には6万人へ減少、内4万人は帰卿、1万人は黒竜江省方面へ移民、残る1万人が施療所に滞在しているとしている。

一方当時、天津で社会活動をしていた民国人馬千里は、その記録の中で、1920年に天津周辺を襲った蝗害と旱害、そして兵災で人々の生活が破壊され、目に余る惨状が生じ、天津駅付近は難民であふれ、折からの寒さと飢えで病気の発生が懸念されるとし、自らの会議で、直隷義賑会、災民救済会、紅十字会、基督教連合会の協力を要請しようとした、と記している。そして、この時の難民は主に自然災害から引き起こされているが、人々の生活の困窮は相次ぐ軍閥戦争、軍閥体制による影響が大きいとしている。この馬千里によるこの「飢饉」については民国側からの貴重な指摘であり、人による影響、つまり人災を指摘している(注33)。なお、これに関連して、折からの21か条などの問題で、抗日感情が高まる中の1923年、日本に関東大震災が起こり、天津の紅十字会や天津華洋義賑会、日本奇災救済会など、また他の都市でも諸団体が救助活動を始めたとしている。その実際については課題だが、抗日の感情と日本救助活動をどう見るかという問題については、その背景に、1920年のこの「大飢饉」時の前述した天津領事館の救助活動など、広く日本からの救済活動とその効果が人々の記憶のなかに継続していた面も大きかったのではないかと思われる。

また、1920年よりも20年後であるが、天津測候所がまとめた華北の1年間の降水量の分布図を示した(注34)(図6)。

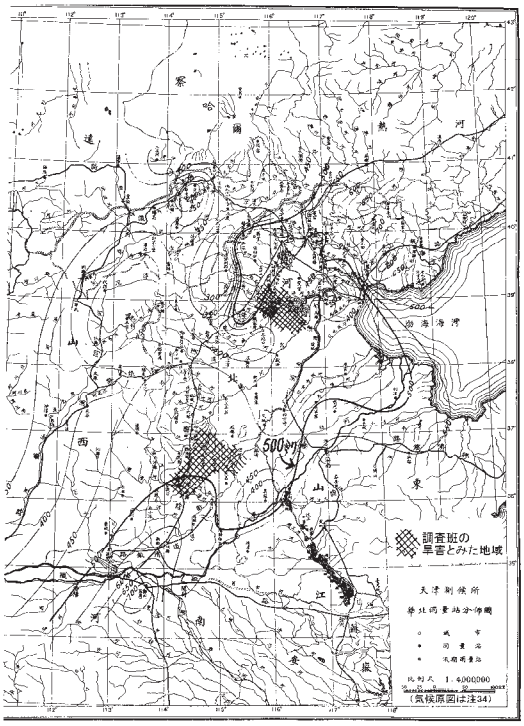

図6　1940年 華北の年降水量の分布と1920年調査班の旱害とみた地域の分布

それによると華北一帯は500ミリ以内の少雨地帯といえる。一般に中国の気候は黄河と長江の間を東流する滙河を挟み、北部が乾燥気候、南部が湿潤気候だとされ、北部の畑作、南部の稲作という土地利用の地域差もみられる。華北はその乾燥地域に当たる。同図の中に今回の書院生の調査隊による旱害と思われた場所を斜線で示すと、その全てがこの500ミリ以下の範囲に入る。その中でも旱害の観察があった広平地区の降水量を見ると、年間300ミリ余りと寡少であり(図7)、不作の可能性が高い地域である。それを月別にみると毎月の降水量は殆ど20ミリ程度であるが、湿潤気候が若干北上する7月が200ミリ近くと目立ち、8月が70ミリ弱で、この2カ月に集中し、年間の降水量の半分以上を占める。したがって、この7、8月の降水量が年間の降水量を規定し、作物栽培の必要条件となる。その降水量が少ないと作物は不作となる。1920年はそのような年であったと思われる。

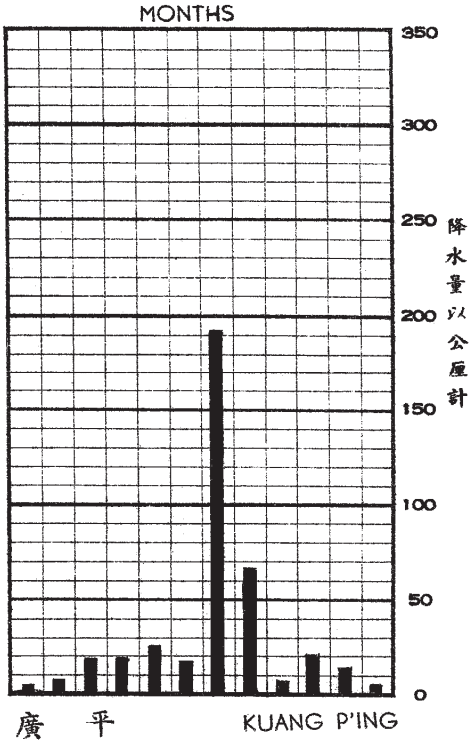

図7　広平における月別降水量(1940年)
(データは注34による)

最後に、戦後の中国の研究者はこの旱害をどのように扱っているのであろうか。

林宏仏は「申報」や「大広報」、「民国日報」など当時の新聞記事を資料にして、1920年には2000万人が飢餓に面していたとし、草の根を食べたり、娘を売ったり、困窮した人々が西方や北方へ移動したりしたとその惨状を記事そのままに起している(注35)。第1班が予備調査した文献内容と同じである。また、池子華、竜玉梅は、方誌や地方誌も加え、1920年は大旱魃出河北省だけでも103県で生じたとしているし(注36)、侯文涛・王均らはそれらをふまえ、その旱害を概説している(注37)。

書院生の記録によれば、当時の旱魃や飢饉はメデイアによりかなり大げさに誇張されて報道されたものであり、信用できないとしている。その点で書院生第5班の調査報告は、それを追認した書院研究部の調査報告とともに、その実態に迫ったものといえよう。

注

1) 上海東亜同文書院研究部(1921)『北品支飢饉救済の調査』、同研究部刊、48頁。
2) 前掲1)序。
3) 東亜同文書院大旅行誌・第18期生『粤射隴游』、飢饉調査第1班「阿木の山系」、659～660頁。
4) 前掲3)、飢饉調査第2班「広野の旅」、705頁。
5) 前掲3)、飢饉調査第3班「砂塵を蹴って」、719頁。
6) 前掲3)、飢饉調査第4班「糧なき民よ」、779頁。
7) 前掲3)、飢饉調査第5班「遅れ走せに」、745頁。
8) 前掲3)、671頁。
9) 前掲3)、671頁。
10) 前掲3)、672頁。
11) 前掲3)、673頁。
12) 前掲3)、674頁。
13) 前掲3)、687頁。

14）前掲4)、710頁。
15）前掲4)、710頁。
16）前掲4)、711頁。
17）前掲4)、713頁。
18）前掲4)、714頁。
19）前掲4)、714頁。
20）前掲4)、715頁。
21）前掲7)、753頁。
22）前掲7)、760頁。
23）前掲7)、760～761頁。
24）前掲7)、761頁。
25）前掲7)、761頁。
26）前掲7)、772頁。
27）前掲7)、773頁。
28）前掲7)、774～777頁。
29）前掲1)、序。
30）前掲1)、1～3頁。
31）前掲1)、3～34頁。
32）前掲1)、45頁。
33）浜口允子(2007)「馬千里日記考(2)」、放送大学研究紀要、第25号73～83頁。
34）天津測候所(1940)『華北降水量綱要』、131頁。
35）佳宏仏(2010)『区域社会と口岸貿易―以天津為中心(1861-1931)』、136～137頁。
36）池子華、竜玉梅(2005)「民国時期華北農業災荒研究」、復旦大学歴史学系ほか編『近代中国的郷村社会』所収、74～75頁。
37）侯文涛(2001)「民国時期北京地区的自然災害与社会－以水、旱災為例―」、復旦大学歴史地理研究中心主編『自然災害与中国社会歴史結構』所収、44～45頁。